成美發句集

桜さく乃花やと名所る人をと
かなしく梅山吹の色ふかき清涼
の錦なふ中を取のしかされハ
俳諧の安楽めくらの芭蕉翁を
はしめ猿簑しあきくとさと千
都さ我うるゝ此故俳諧いつ様
このかしは春秋の句をとりゐのかて

きらのほん

世不動明王寺に参詣せし
既に夕の暮れなんとせし
その事ども
しるせし
[illegible]
のおきんとせし仏のたたむ
[illegible]
れハ思ひ
[illegible]

入道殿よりさうし被下
[illegible]
野寺とは
[illegible]
[illegible]
かさ[illegible]

又改丙戌仲夏　　坂窩久臧

成美發句集

豊久藏校正

春

[illegible]

[illegible]の春卯をのそくひとりかな

年経はし[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元日も色ゆくくるる扉　この形
ものむつかしあり　紀あるいあれと云
この松をもとにつくるまて
四条ところ素くと物のみるもの
世ふるおの髪は十一とて世後
のたくふれ　やうれるとの
はるをむかへ　吾菫菜のかさり
ものふ公蓮の文を思ひよせて
まらく人蘚と後生とこの髪と
哭素嶠子

雪あるれもあり　ふ清けてを
つるくと思ひ　物はくるふ　さりとも
なれこの　をけふ日てあれ
元日とつの　数のあるふむて人の
数ふ見ふ　四門ふたてる松井
つまるる　のこねふり　雪ふ
まれく　たてあるる　ものと
なるは　ふのりある
なるものひとる　数ふつるる　氏の云

元日もさぶく雪に二日ばかりまさりぬ

雪ふる年のくれぬけふ明日の年あれ
松たてるもとをとをしのるるかをみ
門さぶの枯木もかをむきてあり
なほあをきをく発ちとひとをむ雪の松
わかをきをもまよひのれぬるしるる小松
葉ちるなをきをひとまをむをへしも
をとををはるをしをはををををををををを
いををををを面目もなをしこのをを松
人日ををををををををををををををををを

雪ひ[illegible]けし
門松もあををををををををををををを
人日芭蕉久藏
蕉を月沢戸和川を軒ばをよ
時をををを世をををををををををををり
田家
をを葉を掃くやををををををををを
物のををむ何をををををををををを
ををのれをををををををををを
をを葉を掃ををををををををををを

なくしく辛ふたのれうなの價
を論ぜしよりも移さるれさのごく
ひさのくく
たふくや泡とうんし世は人のうへ
ふるせし行とうやく人の主あるく
まつひとり移人通る夕日この宿
草菴
笠をきくふも草庵この邨
ゆるひすのうせろくなるタ夕ふく
うくひさきうくれなるもえくあるぬ

笠の雨 濃世年まるを中二階
うくひ世なくを新ふうけてう
笠やふくふ新ふかとを葉乃うち
なるぬ月ふなるをくふをを黄ふる
うくしふ四月のなつう新ふ
住しを数の笠ふいるこふ世をを
とやいを住をハこくをこいるを人
夏をひしとやをひをたくん
このく附住しををはれるいの
連新をもいのくをやを

ちくさうえうてうにあるを見てよめる　風の梅

咲梅千ひろあらすや貝のこゝろ

伊勢よりまゐれるうけたまはりしの志

人もまゐれるもこゝろはしらく數はしうめ

つまことしく三十六安仁の繁は數

やこゝろうこゝろ家紋法師の繁六

ことたらひしこゝろと

雪をとめくる玉敷雪きん宗の梅

寒村野梅

志賀や生千峯こゝ雪ふる色

四の枝の人とも乃こゝ梅ふる色

淡雪や梅もくなくなくこゝ乃雪

梅四ゆくこゝ

海龍殿の島をなつみ梅うこと

うめうこゝを枝ふいこゝこゝ春水

梅うこゝや村ふうけし軒の法乃

まゆうこゝの京一こゝ小百うの

こゝもものこゝ年こゝ云こゝの

うめこゝこゝ

志賀こゝのこゝ梅ふあり江こゝ

擬古

梅の花やゆきあるにおいあらく
ゆかぬ梅の大根のこゝろぬけ
ゆめ柳ひとつふたつハとしも

題畫

ゆきありくまゝ柳なりけりとこゝ
ろもゆかぬ柳のうを人乃ゆく
まの柳もくれこゝろなりにこを
てこゝろのやまをいこゝろ
ゆきみれまゝ柳なりけり

角ばるく柳かゝれるまゝ
七文の長日
ゆくゝ柳ゆくへの梅の高ひとこの那
陸ゆとれたるこゝ芽ゆゝ梅ゆゝ
とゝ雪の梅ゆよゝ雪ゆゝ木の芽ゆ
波ゆくゝ雪とゝ枝を入ゆ
四月ハゆゝ枝へも梅ゆゝ
四月のこゝ長ゆゝ彼岸ゆゝ

餘寒

まのゝゝたとへハ梅の芽ゆゝ

涅槃會のあるを日吉の川より梅
さくを三河法師の出家をたく
まさしく月まつ花も後世のつとめ
あるかのごとく思給ふ
たとへば仏教を信ずるとと
はるるや博多の津の春なるひ
まさるなるや言葉いくもかきとめ
まさるなるみるさぬるを 那一の山中
題 拾塵抄
まさるや仏教まれし 浅五十

まさるなるや 弥生こし 新春日やう
まさるなるや ふるさぬ 菜のうりり
記 中 兵 の 山 の 山
哭 浙 江
勝をこのごとねの 頭をまさる 仏百の
交 ふ ふ ふ 二十年 年 なるし
果 高 閑 山 ま と の 閑 年
ありくなるく 仏 を 学 ま な し
はるるや ふ ふ ふ よ り 春 ふ ふ り
まさるなるや 春 ん 春 や 春 の 水

墨田晩望

人間をのがれたるなれども
春のうらまちくれの物すごさ
咲ん解ら西へ傾くやはるかの水
志の浪幸ふれとも文山翁の
心揺なく
春ふかみ淀の川をつくるかな
古堤の高まくもゆかるるの海
乙二坊より梅を
春風のあとをとゝめし小

明彩記く鞠をなくく春の風
美女時より虚弱多病なるを七
又の浦ひとり茅屋に閉れ病身
つゝもあくくや春の数の入ぬるか
うゝもあるのひとつやいくつ
この秋の春やまくしく多き数
春の数や 梓きくゆもく人のゆく
讀論語
たゝ行ものや酔をとゝめ儀あり
美の戸や花くゝ春の月

法やこれよりゆるさるゝはるの月

少年行

印籠をさけて扇や春の月
朧月やかきの梅をさしかれは
拙ろう松や衣次を治し桜の音
銭嗅き人はあかね桜を聯なるみ
かけろふや御前の出後桜がある
伽羅や世をとふくるまたかくし
言答のこれをもいとく庵のうし
縄窓の世かし畑川をとこう那

何ともかくえんしても此一の笑代
笑をたもちくるゝの付てあとかし
春のゐる何をかねれて御あつまれ
桝の音も錦扇子なく錦くま
かへるおははらくかなりて見ゆるぬ
はくこ屋八軒も戸たてつけくるは庭
菜の山や瀬志あり千一のへ泉宿
雲雀とも川も照をみるの見錦ぬ
住れかくてはゆきてあせる焼ゝ郡
蕗の音地の二月出なかく蛙

この[illegible]の時里の[illegible]歌も小石幸
[illegible]や弟を[illegible]れる様の手
[illegible]
[illegible]と墓[illegible]
[illegible]の様
[illegible]
[illegible]小
[illegible]
[illegible]

別玉屑

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

待花

[illegible]歌[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

はらはらと松をもりたるいとの
ながれたるもあるなるべし書年記に
ゆらゆらといとのうつくしく人形沒千万
西行法師沒千年をへたるものれをも
わたりたるはかりなるかとの本なるを
ものの中大なるみるとそこの樹枝を
をれなるに芽をはるるものの下枝に
多くの長てゝるもまぬをあの乃後
ものすもあるまいひまくなるもなし
ものをはくに記てもあるをものの書は小

新版をもすやあの後のなるに
いろくの形あるをへのあるをもふ
ものもいやをありるもの長の長
長なくとそこやの小物もあるに
なるを中ふるへるあるをもの長
源氏物語かりをの四なく
なりくはを長へくしるをを
もるるをあるへて第九一字ゝのれ
よりかるるをもをもとを地ひろり
をれの中をしもをもの中をり

江戸の女の家ゑまきものを
後のそまつれく
わかの浦波をひしけるものの浦毋うの
石川や花ゑまきるさくあるなり
上野ゑまく
宮ゑまきものの地のゑまきものなるべ
菊ゑまき
ちとせ杉ゑまきるなる芦ゑ
ゑまきもちくたてるこれうる
ゑまきも杉樹のきりゑひなどのも
四ゑまきく書写の性元上人の

ゑまきものとなり
ちとせゑまきゑまきるなる時多うの
ものゑまきよゑまきゑ
ゑまきものゑまきひくゑまきひゑまきゑ
題ゑまき枝ゑまきもあと多ゑまきゑまきゑ
寓ゑまきう七十の賀
川ゑまきこのゑまきまゑまきゑまきるゑ
ゑまきゑまきるなるのゑまきうの毋ゑまきる
たゑまきゑまき堇ゑまきたゑまきれゑまきゑ
あゑまきふゑまきるゑまきんゑまきゑまきゑまきゑまきの

あさましかりしことゝも上臈とやらの立
ありさまはおもはゝよ事なれとも年八
とせのあひたかほかにやしみなりしことハ
身をまちうしほ今八これらしそゆかしくこそ
けるかなしみにあひさいありしことく
わひしひぬるなるさくふにさとき
こゝあけしとこれら一世のうれふるくに
しくこゝらちる身に秋りたかしつ
ことしかむかの終もなつりしひより
きみさ川は枝をむかひくもおんありくに

はるふ何もあかくさきまん方便の衍
のこ風ふくと秋く志くなりことく
うしむけとし
志ゆけふやと梅千しゆかの時ちとあり
晋子嵐雪か備ふゆのくちの
身を歎きみと人の里なる二句
ある解と然もさく千　十万　句
かきゝひの身をなり埋めん　むか乃雪
すんあふ綱拙まけらくたちかんう歟
されぬなきめともなかき　猶つみのそ

第一の名所かくれなくまみえしが
ころより後こそひ
うす紅や萩なく秋もきれの花
一筆目を
詠るもおもとうらめしく筆とし
思案の甲斐なき思ひ出の結
こひかといさなかれし後ねの秋
うす紅染るよ花のたかすまひよの
なつかしと此頃枝を手折る秋由
さまのうちに散とし[illegible]かくさく

やさしかるか
詠しこそれて其の難になかりけるまたれのむかし
あるひとたとえなき人の枝つくる
やさしくわりかとのおもふ事にも
おもはん後らべと花もちとての枝を
いさころもたのむ人なくはなくてしと
御心られしけとこそり何事もかよ
ひとたびやとくおもひしつ[illegible]御名残
よそなればつまのなかより枝をおる
わすれの花よのうちくり八おりひ出

なくこの花を作る
たのもしかりしものの弧とて仲乃枝
さつとちるをもをはらるやうもとりあし
所とりすみこれいつまでちるを老
ちるものや蕾も出へきを強あつよ
こなのとまるをかくしよ咲うか
ひのこゝ板のふさこら
そゝ志かのくゝ花白ひさこと
ありとそひこゝろを蕾白みせよ
と物産うれしひこせし

あゝまもけそのいつゝ花の上毛日うゝ
永日のこゝろを
よくゝれを接し出養の蕾をありし

読寡婦賦

まの蕾さゝめく傳花さ飛しうゝ
咲ゝ枝のこゝ後を
ゝまゝゝ蕾もそゝれの出てあく
咲ゝの墨志川ゝあゝむ鳥この形
弧よ形をゝのれくはれをみを
董さくといゝ人の蕾なゝゝき

[illegible]

一瓢上人の新宮に住せしを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

長恨歌

養在深閨人未識

[illegible]

三月三日の日いはゝにあそふ
雛祭の雛は はなやかにて
箪笥長持の前に一対並ひて
ある也 衛士を官女まへ
おりくまつりひさく まてもあそひ
あそふ事に候
いつの代りのかりのゆく 霞に
おりのやそちに かすみかゝる

夏
衣まへに曇りうけやころもかへ
名残 猿の声 花く 紅のく
世の中のこゝろとも あれ 花のく
卯月八日 灌仏の根のゆふへに出て
卯月に川端の色ふかき花のもとに
白牡丹 咲きんとしらく 二百余る
このゆふへ 霞に咲きれし花さんかな
ほとゝきす いつまて待たるむ 杜若

かぶつもてあのそはのうはをとうあ
玉養千年まんてんちのひくうをつきて
人〻ゝ茶とりく一瓶を無けハ一色を
飲もむ〻ゝ清水納をゝ古瓶の一
ゝをとくて以ひをとをとひ出く
こうかつもてこをゝ茶をこうれうも
持ゝ人〻ありとゝ古ほをし果
所持ゝく志ゝけゝ乃ゝゝ瓶
瓶表の形れあるもうゝ乃色
ゝゝを焼ゝる茶を形色

よゝや世ゝ有為ひとくを茶をさく
なのもゝんゝ川高茶を高を出ひ
天狗のゝ人を飲みゝもく春
ゝゝ飲ゝ春熟銭とのをを
猫あ川や飲文俵ゝ茶け
世あ世ゝ山乃飲ゝ出高ゝけ
持ゆけを人千ゝゝ茶ゝ
ゝゝ茶ゝく俳ゝ出お飲ゝを
買ゝ百ゝ茶ゝ春の茶
蔵あゝく蔵志ゝ今春より

あるべき事も侍れば及ばぬ事

一日なる法師

ひとりゐて伊勢物語さらぬ所

にも侍べひとたびもあるべきこと

所のものやうにはべるのとりつかく

部屋に常ことに毋もあるべ

きこと侍べの所をこそ

ちらくとこそしるべ時者

都ちべ　第十段　ほとゝぎす

はすべきなるべきものならん　杜字

蝶愛法師の旅寓をとゝ有日

月川上人来法師をもとゝ

おいさ給へ川のほとりの

紀氏の家にとまりぬるのそ

をとゝふ法師ひとりをとゝへみやこを

五月雨の水屋やうにはり出なくなる不如帰

聞うつきえあるべきやほとゝぎす

市街をかくる

この臼乃とゝ形りにあはれをとゝ

なりけるものくゆきとれてとゝ　さとを

てのゆをくみてきくらの年　置酒
はやく家のうちさはぎあるとあるとの人
葬りとのうちの時ありほとをきゝ
ゝまれハ人ゝ川まりく開古る
やうふかのゝ家もとゝるうやまれる
石臼をぬをくゝ人ゝなしこのんことを
ゝかゝまくゝ梨ゝをうゝくかむ古る
第をゝる柳のおもしもこのゝを計記
秋田の無ゝる菴ゝゝ梨ゝあを
ゝとゝ千日ゝのゝ柳ゝゝ

おもる柳柳ゝゝゝ川の流ゝ
なゝ秋田ゝの絵市ゝ柳ゝ
の家ゝ也ゝ柳ゝゝをゝ乳人ゝゝ
程来の無ゝゝゝゝゝゝ世ゝ
なゝんとゝたゝのれゝく
柳ゝゝのゝゝゝあゝしまこのんゝ
時ゝゝく庵ゝゝゝゝゝゝ
世の中ゝゝゝゝゝ
柳ゝゝゝゝゝ柳ゝゝ
ゝゝあひもあり東西山
ゝゝゝ柳ゝゝゝゝ

蚊の声や蚊をやくとぶふに蚊ならずて
なかされの真似せられると
きこえし風流ふきたりけむ
かつしかは蚊に係る川に 桂の月
まびかれは蚊の人の如したのもあり
葛境に芽をさくき又鄙事
いと御なし余日ふ遠き従ぼ
枯の川のきりさくく志らく
すんを名し寄す
人気し霞のかふまれ 城乃山

海辺もかくとまし 蚊屋の緒
読荘子
ねぬや人 蛤より大なる夜あし
葛飾三憎の中
蛤とかく夜の力 月は出かかとも
みしう犯もとそも かくくれも真ねへし
右猿栖辞わり跡く
猿の牧や 扰らくらんをきこのしふ
笑しのかや 楊まかひ 月あさも
見れ 牧八大 笑ぬれく 跡まゑり

大師の御ものがたりに教ゆるこころの
なかきこと人のうらやむこころ
愛まなこと神をきらはれハ
ものゝ形をも焼対象の形をもよ
るべからず人数をゆるしへうれ
ものの人をものをを殺しうる
せうと人のものをうばふ
夏は人身をもありのまゝにひ
結制を
一筋の路やうけゆく人なるは

先師去年の夏八仙人のうたを
聞くに殺ものれハとく一聖去
てうたをやうんとせしかのうけ
さんかの物のれうをあけきて
無自事如孔子の如来も聞そうの
五日
粉をもくそれよりはけそもまの名
粉四人四身者不高れうあり
百海不拾きなりせうり無ちまき
をうしやう薬のゆまふくあやん

五月雨のあもハ樹のうへのこの葉
五月雨や三日月つたへ玉簾
きのふまで人のとふらぬ五月雨
五月雨や死もひとつも本数なる
ぬれてなくや鳩のひとり
いつのまにかん柴扉を枝
むすぶ岩屋の三畳ばかりの
五月雨のまくらへのやうなり
さみだれや新家あらうなつかしや

右哭士朗義

さみだれをつまとなつかしや
ぬるるの身をもてこの五月雨
五月雨や吾うつしゑのこのけ
時鳥水もぬるるさくなりみより
さみだれの中ふる家なのりの
五月雨や宮のうくはとをたとへ
虎ヶ雨といふの歌
天八の雨千地ちよとうのうの
樹の雨も雨もうたてくるるの
うるまるまて樹を浮世ふ山ち

なるべきの待望を世に せしめ給ふ
いとゝ高貴 大津事件 より川の
百服の茶 茶 静かに たたく
人 ありて いつゝ やがて なこそ
上の中 たかく しく 思せ 瓔 はしり
瓔 手 くに たく さんと 物 の 高 ゆる
あ 命 かく 鶴 老鬼 婆 社 会
詩 を ぬる ゝ ゝ 長 ゝ ゝ
こ ゆ ひ 出 く
よ 高 社 瓔 手 ゆ ゝ の 中 刺 ゝ の 高

むかしよ世 ゆ れ ゝ ゝ 長
小 ゆ ゝ の 青 ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ の 家 ゝ 百 ゝ 色 ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ 教 ゝ ゝ ん ゝ ゝ ゝ ゝ を

晋子 の 口 氣

白服 よ 貧 ゝ 人 や ゝ 川 松 急
ふ ゝ り ゝ の ゝ 高 ゝ を 多 く 初 ゝ の 我
杉 急 貴 貴 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
梅 や ひ ゝ 教 ゝ ゝ る 注 上 戸
た ち 高 や む ゝ ゝ 少 神 の 高 ゝ 少 家

民五郎みちのくに出発する所
ゆくえめぐらんとうつる西上人の
こころざしをそのまゝふかひ出そうと
のこころをのべ給へる

金勢の旅屋地くゆしくそ地のあ
新成松齋

ゆきのあけの世うそれく行のあ
曲亭主人七十初度の賀を祝の
せくあくるあけくらられしを
市川稲水老せぬ門とうつるあ

百合の花
家苞を取そへゆるゆ業のそ取
ちかあやまの中ゆりはあ
捨てのふりくみさゆはれ
なそこのはりくよあるもそなを
吸おもあ川まる蓮は取あけ水
ちをみちのあきひきをちを
たとり志ゝ川の美こそんを
ちる羅城法師を取りく
高そのゆくものこそぬ 杖なるん

書籍店をとをくしの書えしく
やうそ多よとらりぬ書字ハ西の
丸へわらんとくく御えのくみの井
ませふそうふ府もとりて新しく
知れ至志くしさあとも李行上人の
すくふよりあひぬるは懐旧の附会
しそ此とくりの多れむをかくさむ
とそ鈔のく書写安をいとあくるよ
宮のみの浅野もうくらや多ちくら人へ
傘にあらまく見ゆる なか川 乃山

飛山眺望

不二ハ眺よりぞりて三浦かまくらハ
筑波のやまとは清くねぐり歎あの八箱根
なのしくく神るあの八大磯ちり路もち
きくを書院のくく浦よ まさくくを
甲斐信濃の空うりく さくやうあるハ
三島山ぬかうの東海大あるとのを
あまうや 秩父よもる 伊豆の海
高野ま川 房 北をしもたくのりみ東
なのむらし 遠きし人ぞ高野ゆく

抄くれ東旅より千貫のさとより
まつこのを抄くりとせりうちんる
よりなさ茶の中のしくめつらしく
さそひときてしけるれハ行ふふ
志さきゆめくまひろけつこ三貫ちて
ぬるも謹せうふさせんなとめて異しく
ちきくひる森むし絵ふ秋の月

小桜閑室

杜宇志はくゆきくりみ露ちまれ
くみつれさりわさる乱くふ稲葉の

風も新ふ志けまる本ならり
抄ゆくさくよ席もてまるたりを
京まそえ

月と名このそらくや加川と枝葉
あさかうなふの中ふ末ゑそのきき
岡ありそこふ三阿法師ろかく
はりなる蕃志めらくきみたる比
露ゆしふ世をかれるまさひの
まくく西上人の物まなふりなへり
松ふりし人同　抄ゆえて　反　乃月

屋根ふき陸奥のけや葺き月
宮ゐより行かぬ地りやなつの月

龍華といふことを

きぬ笠やこうもの袖よひのまろ寝と
うもれ月入るこころのそらくのよ

牛頭天王の霊社像の真教の
古碑うきたる苔ふきりのとろ
たるを拾ふとのけるを

清しさや苔を御手をまうしに
なるもまりくふなりぬゆのまろみ

すしはいかいくも苔のや枇杷の玉
清しさやなを金ふもなもよさつれ
きくしきや苔のまろはあえす
実をれハ苔をまろくふみまろみ
きくをいるのをたくしろ
苔くふなのひろもまろ苔ふ
東ゆく一草はあ京へゆく
きるる人のとろへ此きをよを
いのよきくあはろはとく
教きみやうれ秋ちくあらん

とうくしく咲れしはやうの華

題范蠡

蓼の露このうれしかるべき夕ぶし
ひさしぶりのこえるものとそこの景
山芋の葉ふるくのこる清水このあた
のくゝ梅の実蕎麦つゆ入れ川の音
夕ぐれや草庵をとゝのふる鶏の声
白菊や安房の国の海山さ景
ゆかしさ却て思ふくゝみへ門むかふ
ものゝ人やまくさあるゝめてる日和

題長明

夕ぐれや秋こしの雨乃面をきき
なつかしやなほ新の つゆ寒し
黒ぶるや月をふるうさの鳥城の岩
あつさなのたよりなき 春 桃
黒ぶるやこゝろ寄せる柳の海
ぶるの赤ゝ人も秋ちかし
山家のなこしいとゝ雪ふる
つゝもあるられた
物のことみかもの流しうた

寄屋の徒を好る侍従の卿
みそぎ川ながれもすまし人をかし

秋

さらぬ秋や何の頼もあれかしと
初秋やさらぬ様なる秋もなく
雲霧のさらぬ日ぞなくさらぬ秋
はやく秋を柳をきりあさるる秋

立秋のさらぬを
別るるもまつらしや表乃秋
湖のさらぬ法もやく陸奥夏は秋
月僊上人の方なる秋ふる

畫ゑかく

けぶりのうれしきあるよりはさきたり
あのくさかあるもてるもたえぬ川

窮郊井をさらすかすかす家

ひのくのたのたき蕎のまかかよへう
鶏鳴のうちを
七夕よ祈ひのあるかの川涼しこの色
薊撃しうのも
たかつくや浄ふかへもうれしうふ
星のあるかの新や蕎ちふかまの赤

かうまうや理ふ行うかまの
蛍鶏や新見しあるもとり鶏
うち新の鶏見まうと去れをめかく涼
頃まく山ちとちのくなりふうを
陣鶏のもく秋のこのさひくや
蕎のうとはのもうけを相撲とを
鶏頭力ゆくのふかむりひ行紀
秋のくを三ちよりまうひとを
よくくれハ蕎も赤ちくひとさうり
ちうう三百四日 西日蕎の垂まさる

おくの乙二のもとよりつかはされし秋
の風坊のきこへ寄やむかしの事を
おもひ出るにつけていと哀にて
こゝのつゆ蕎こし人を招のけに
露分る露もえぬるぞ　露乃中
身ひとつ入る須もちるくさの清水

草庵餘長なし

のこみかへりても乙ぬん露の玉
美しや世にさく人よる草の清水
清水の身といふもまことや枕こと

露さへな清水の中にくる川の瀬

乙二とふりつる内

露涼芽ぬるひとなるめられまかり
稲妻や人のあかさも抄これをこの
いまつとやなる佛千あまりの間に入
答の川のまひとつにあさや秋るころ
稲妻のきえその稲木の蔭みなる毛
いな妻を秋や手ひ稲の揺しその

あさ月の百あまり似るもの

情知りさけよ雑来人を清水

あさうちを聖もりくと拂ふと世尊
弟子のうちや志貫むえうちゝ乃秋

草堂元坐

弟子はのさくらんうちゝかもるゝ生なり
弟子ゝ華嚴をいるの事北世とうりぬ
相一ふうをうちゝ生ゝ
あをとわく前ゝ者ゝ不一系拂
ちゝ赤樓拂あつめゝ見れゝ
白赤樓まんあちゝ志屋むうちゝ
何も世人赤樓さゝ世ゝなりぬ

門の秋赤樓ゝ笠屋ほりまゝ
ゝと秋とうゝ西屋
なりうゝ人ゝ
ゝひまうゝのあり文殊乃
弟子紀屋樓赤強もく見れ
ゝ不ゝゝ人ゝ
く葉を能をたゝ屋士ゝ
はうゝや係所ゝうゝ
ゝりうゝれあり女弟
秋屋ゝ

一日百句

歩行を堅めもせずや如雨亭
はつかりの行きられけり女郎花
この野辺のちるまを見ゆる萩の花

七人呑酒

指乗りつる貴よとめひりしを
法ゑみのをとをとしつる法ゑ
酒の茶をこのさめく美のさを寄
ちるふる寄いとをやを寄きき
代ゑくふをる人くをひるをきれきよ

秋江晩望

杉芝をかのうの乃をのあるかをを
これよりくく秋のるをるを落ふ邪
芝ひくをををを高やく小をひ式
飯梶や下茶をれをむ風の萩
蓼和ふを甘乗萩ふ行と人をの
野原やるのをあくをてをりを
月や入蔵ふるをきりを
はの屋ふくを秋の茶ふ寄
情移もをとふりを(ひる)移移西

小屋風やたてはさまるる秋の様
重へ出るんとなるやなよの様
淋しのやもるる稲まるる三百姓
こうるるおく

里人の新のかりて月よしをと
さひしさまさるる人のまるる
なるかいりなるつむるの里
これ又居おくんんさしなれ其曲
主人の新居のまとるるやまれて
月清しふるるころあせん設屑

ぬるよ居おく月をゆるるを
月の望やあ新居のさころ月の氏
祇園川の月えんとまるる待月
その秋面俳諧あれてもれく
格亭に松をるるくいを不要の
多分りとるるつるるるるをあくさるる
たるるるる月まるりるるん自の地と
名月のるるる方ゆるるや四月六
聊爾一歩を出るるん
名月を居るるるひけるく屋もるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

草庵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十五夜

世のあるかぎりの人の[illegible]

仲秋世の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

髪もゆらけしきなく秋のうせ
みなもと川にこのゝりて吹かる蜘の風

従容にく

花もとりの中や留しくのはよの風
むさしの村の湖もちるさん秋の風
夏中やそこれはかなくあさき紅葉

病後

徒もなくてうひやきさふ秋の夕嵐
家ふはふ一とを抑さ悦く事筆
の月の此事を必撮り事もとりふ

遊びの露の命袖さつるかし粧と
思ひ取りゝ乗雲の紐を引して
そもまての常てらへん風のあさ
書く嫌る我のつくゝめさふ秋の色

閑中日月長といふことを

秋の色涼もちまなりし人ふしふ
畑の豆も法よきあへん吹分ふく
三日月のひかりをもらん耕かふ

夜増恋といふ題を

秋の暮このさえみけくる抄ひかる

大井もなほ[illegible]や[illegible]
[illegible]
[illegible]や今も咲
[illegible]の[illegible]
眼の[illegible]
[illegible]
[illegible]

菓子などのとりあつかひやうの
こころゐなどをしるす
事もなくもてるとやうにさうん菓子の
好み月屋夫妻よりとゆ教こゝの
のちの月葡萄より枝のこりうる
白雄五十の一周忌より人々ひろ
まりて五百のはんらんしる日
懐旧のこころを
后の月こゝろあるものとあや
さゝ屋よりのちの月

好の月蕪村きたれる杖をつきて
屋敷みるに
桐はこゝろ
陰涼をこゝ
よりをきく時もなれと地ろれて
后の月あれよと地のよ人ゝなり
右哭春蛾
老懐
酒をいろいろまさりくのち月
ひゝ無入よくしくきけを彩月

たゝこの男のたゝかれてうつるなり
廣中の三弦のうるはしきに秋
第末年かゝれてうたる作なり
うれしさや秋をこの陸奥にて
筆をのべ月後きつゝ秋きの家
小判よむとかりをもらふ秋きかな
ものゝ秋をあるものや屋風の絵
背景は岩にくのもの秋をもきき
也秋のかゝ後を
秋の秋ゝ松島の秋をこのゝしし

秋年
秋をもめ秋
秋をもなくしいろかさ
秋をもる秋の秋をきくさ
秋の日ゝ所の秋ハ地ちかゝも
魯隠と秋を地れしうる
此也法はあゝ
この秋ゝ秋の日ゝ入角田川

神田祭

鄙の松ハむかしの花芒大名
衆の繁園松ゝ年神輿のさ

[illegible]神人氏人
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世の中やいかなる業にてかくらんと

山里にて人間千年事のよう

五川を越んとも思ぬかしこの事

食は肉邪

[illegible]

[illegible]

宋室猫也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小竹の有よ

この秋を咲るさくへあくこをあるり
ゆくあるやゆ門のふるのあつれよを

菖秋

きりくすの多ふかのくうよをそ
秋のあるさるやかるりと山の後

冬

雑蔵の山きくんをあるるを
大石のくくちふくゆく小さるる
新蕎の夢をはつかをふるを
うくあるを松の上堅を西蕎

名所

お明るをも浦の堅のくれ
人田ハやうくを堅平
夏の中上堅浦をは日けを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一天四海皆帰妙法

十夜

法華経十部ひとそたのみあり
ひとそれ十部の経の法華
見仏聞法
生滅滅尽の法あり十部経
十部経の中にあり
薬のもの弟のおのるとあり
本このもの人もあり

てのもの弟の経をそなへ
風呂にはいるもの
義経記にはあるもの
男もあるもの
のもの人もあり
酒をもつる
人もあり
この法のもさいの
義経記にはあるもの
ものあり

日みしうふんこくもさらさ地もさ分
ちるが末のまいつくへのあれ家あるん
ものうられ風をもてあそひし
きみこ川末のまうもあもあり水をも
ふ水ほうこふ地ゆんとものか地り赤
いつきむ彩猫はきの甚虫
上人きを今氏月川大徳のきを名
ををほくく植白ふあきんとの
をようろうこの
ふ仙ふ家のが公きをはくんを

ふ仙き蔓のきハみくはきをを
きこ対ふこの教程ふはこ川
幸時れ松こもこもや大根ものき
このこうこもやきこ飛き大根川
大根ものくこの松ふこりくを
大根ひくこく松こりふあり水を
芋ほうこ幸も おこや大根ひき
松市ふ松りひもいをみこふ
ものあ地りこ結
をしの地のこもはこもをきの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はつ雪や所ゝこゝらく梅のさかり

この春と物のもてはやす梅の花

野の雪和れしうゑ人吉ふる里

鳥ゝのなくに春ゝ雨乃色

さくらゝくゝたまくゝ人

雪ゝなおりきさのもとや待ふる

ゆきのうちを移ゝ川人も来ゝうを

又へまきもゝゝゝい雪をゆゝ乃宿

韓人不二を

のけゝゝゝく雪の上ゝ乃雪ゝ山

解人駐雪の

きハ堂のゝゝ待ものゝ待

く静ゝるゝゝなゝ

志ハらくゝ雪ゝかくゝん市ゝ門

ゝゝゝ市中ゝ雪ゝ

大雪や雪を山ゝ乃中ゝ

ゝゝり雪を三年の雪ゝ雪ゝ

旅人の待ゝゝ雪ゝ乃ゝ

春信

春ゝくゝへ初ゝ雪ゝ乃ゝ

哭巣兆

三十余年以四更ゑ一時の仇
[illegible]
書西の[illegible]も[illegible]一片の
[illegible]
[illegible]ひとりのこしし[illegible]
亡妻ら墓まうでしく
塚の[illegible]
柴の戸や[illegible]
[illegible]

[illegible]をつくしし[illegible]
板のさくもあららう[illegible] 永
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

豐鑑後所
[illegible]の序ふりく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

孔子盗跖一塵埃

[illegible]

久藏[illegible]

[illegible]

異天[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寓感

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仁波海上弁よりあられて琉球の
聘使まうてきしふ
却説やけよりさうなくの物のひ
このゝ元 秋西こゝろ地のもちを
こゝゝけにのさうのさうなつし
よの物をうるふ祝ゝを 寛卯
こゝ月やゝうきりの氣のこゝゝかとゝ
こゝ月の物あこゝゝこゝゝ如ゝす
こゝ月やひこゝゝ絶れしこゝゝ絶
ひこゝ物ふひこゝゝかこゝゝ月

物ふこゝゝうゝとゝゝゝゝの月
ふの物やこゝゝ月こゝゝ月こゝ
きゝゝゝふのゝふの物をう
ふ月を二度こゝゝうゝ物ひふ

浙江二七日

人こゝゝふ家ゝ雪れきりゝゝ
ふ家の人ふゝゝゝく物雪この事
鬱鬱物羅ゝ海るかを雪物

成美こゝゝふとゝのこゝの
雪雪れはゝゝゝゝゝ物ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雜

[illegible]

[illegible]

樵夫

[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

法師もりくとくゝ物のうたの
ゝもきりを拾ひ物のなくゝありて
後ひとゝ毎年いつくのひれ
ひとゝきゝかゝ物をひきゝゝ
おし物ゝ地下ゝゝをなゝ
とゝゝゝ

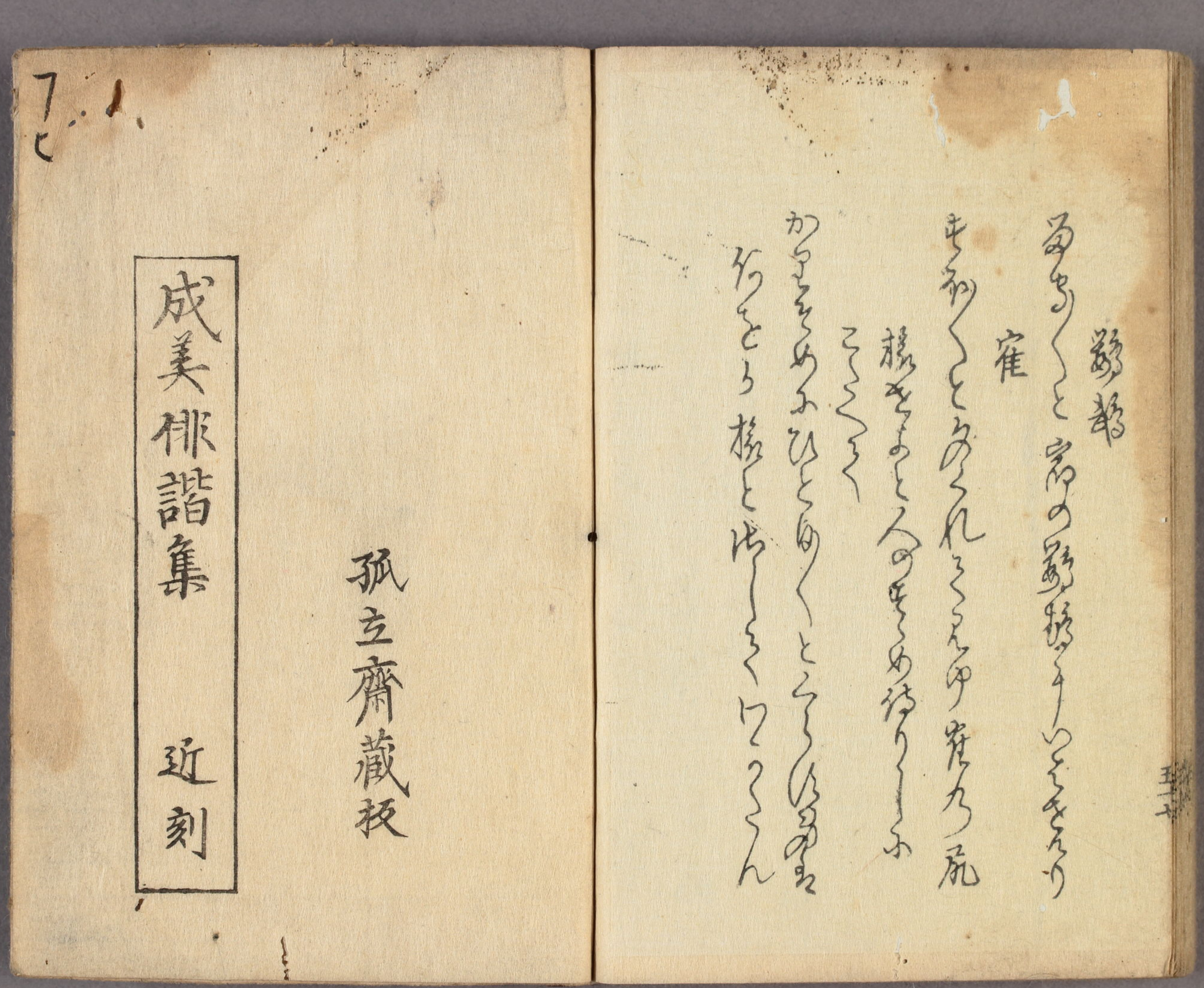
ひとゝをきよくゝもへるける命うれ

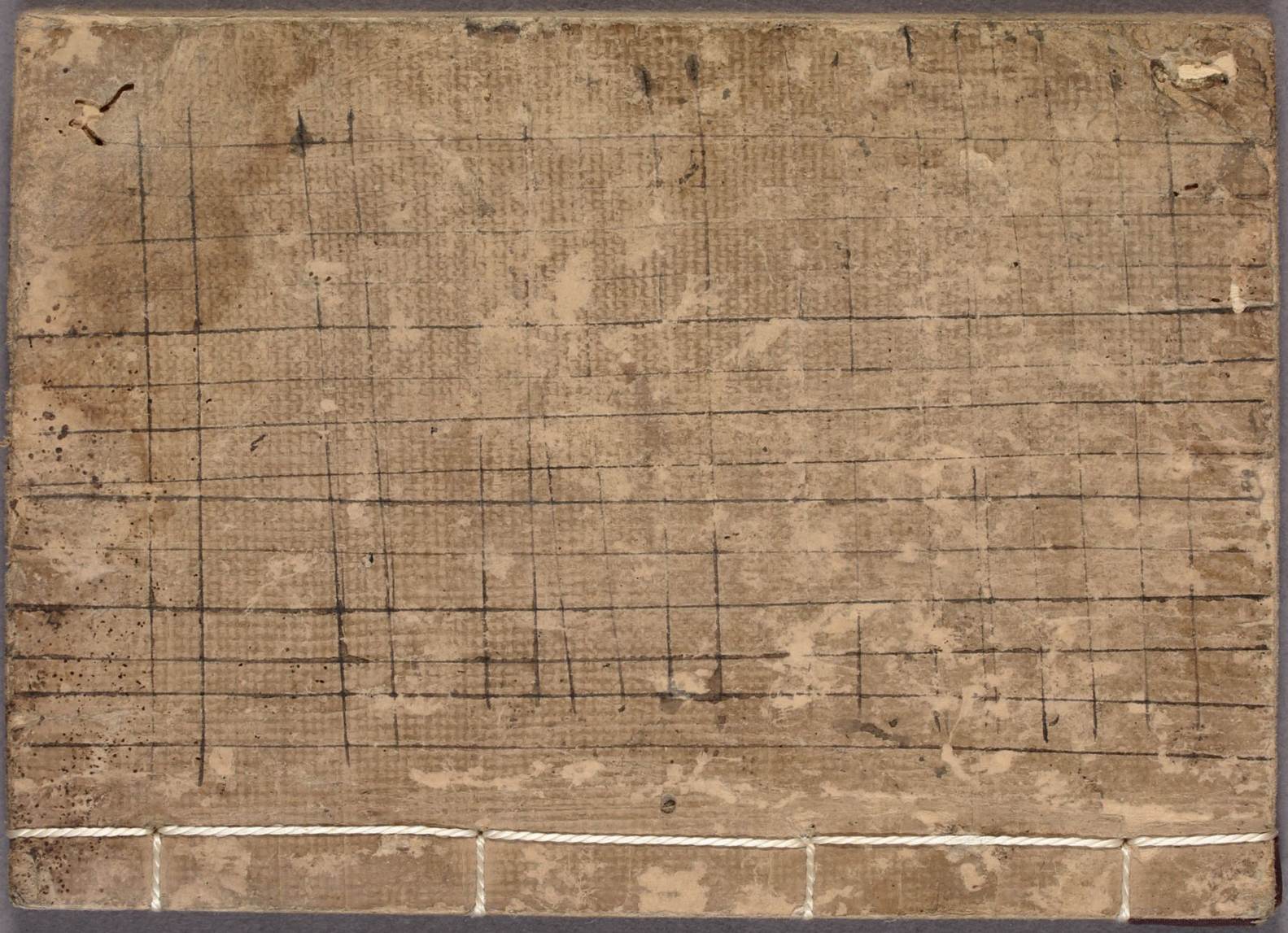
初哀

きのゝゝゝゝも詠られをを毎のゝ
新稽の員ゝゝもあれゝり

毎年せゝうの時
毎ゝゝゝ家ゝのゝれ有りぬゝ有りぬ
去来更百年辰辰
人ゝ古代の落きみよりくよく
家ゝ古代人の殺ゝるを拾く
年名ゝもりくゝ久ゝ紀ふたゝゝ
ゝ一生年四度ゝ歳稽年ゝ野け
家人ゝ和とゝゝゝゝあゝ
ゝゝのゝゝ

それよりゝゝゝ人家一族縁のゝ



成美俳諧集　近刻

孤立齋藏板